

国指定天然記念物

おお たま
大玉スギ 1本

指定年月日 昭和5年8月25日

所在地 徳山市須々万本郷 飛龍八幡宮

スギは、まっすぐに伸びるといふ「スグキ」が語源とされ、スギ科に属する雌雄同株の常緑高木である。

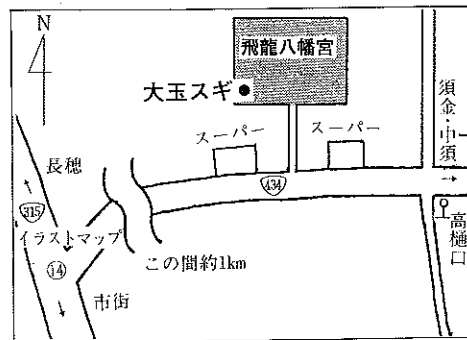
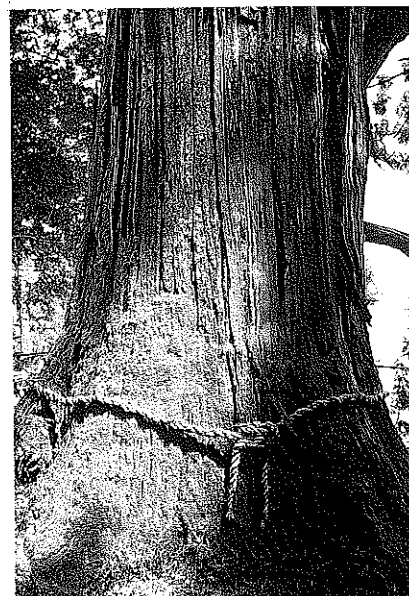
飛龍八幡宮には高さ34mの巨大なスギがあり、枝の繁る様子が丸い玉のようであることから、大玉スギと呼ばれ親しまれている。胸高幹周は10.5mである。

社伝によると、後光厳天皇（在位1352～1371）の時代、この地の岩に京都男山の石清水八幡宮から龍に似た光体が飛来したことにより、飛龍八幡宮が創建されたといわれている。この岩は神具岩と呼ばれ、現在も須々万の地に残っている。

社殿は康暦2年（1380）に建てられたとされる。言い伝えでは、新庄と本庄の2ヶ所にスギを植え、よく成長した方を社殿地にすることとし、大きく成長した新庄の現在地に社殿を建て、そのスギが大玉スギであるともいわれている。

県内で最も大きい樹木である大玉スギは、たびたびの落雷や風害にもかかわらず、永く人々に支えられ、今も威容を誇っている。

根廻幹周 17.00m
胸高幹周 10.50m
樹高 34.0m



国指定重要文化財（絵画）

けんぼんちやくしよく すえひろもりぞう
絹本着色 陶弘護像 1幅

指定年月日 昭和49年6月8日

所在地 徳山市大道理門前 龍豊寺
(県立山口博物館寄託)

時代 室町時代（文明16年・1484）

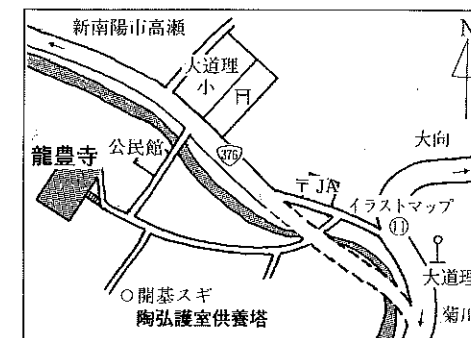
陶氏は、南北朝から室町時代にかけて大内氏の重臣として活躍し、徳山・新南陽地域を領していた。

弘護は康正元年（1455）9月3日に生まれ、応仁元年（1467）応仁の乱で父・弘房が戦死したため13歳で陶氏の当主となった。その後、大内氏の内乱を治めるなど活躍したが、文明14年（1482）5月27日、長年敵対関係にあった津和野・三本松城の吉見信頼と大内氏の館で争い、28歳で世を去っている。院号は昌龍院殿建忠孝勲で、供養塔は陶氏の菩提寺、長穂の龍文寺にあるとされるが、実物は発見されていない。

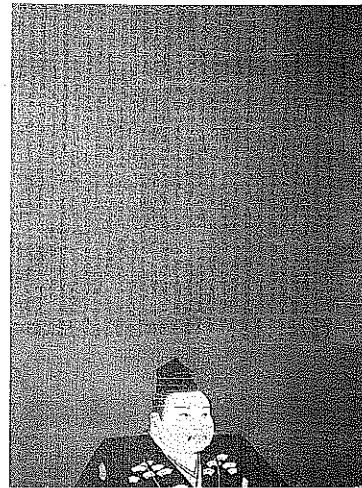
龍豊寺は文亀元年（1501）夫の菩提を弔うため弘護の室・龍豊寺殿咲山妙听大姉が創建したもので、彼女の供養塔が寺の東南、開基杉のたもとに建っている。また、弘護には武護、興明、興房の三男と一女があり、後に厳島で毛利元就と戦った晴賢は孫にあたる。

この絵は三回忌にあたる文明16年（1484）に描かれ、雪舟の筆といわれる。安定した構図、伸びやかな描線は見事で、英邁といわれた弘護の面影をよく伝えている。賛は雪舟とも親交のあった禅僧以参周省によるもので、陶氏だけでなく大内氏の歴史を知る上での貴重な史料として、非常に高い意義を持っている。

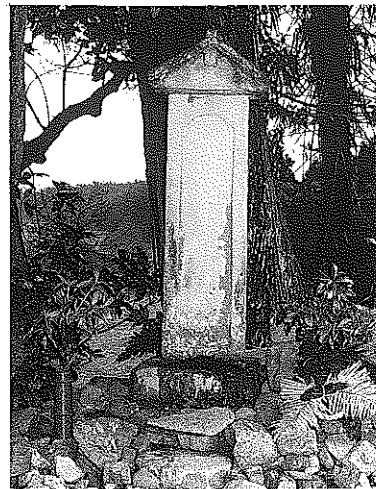
総縦 171.0cm 縦 80.5cm
総横 52.1cm 横 38.2cm



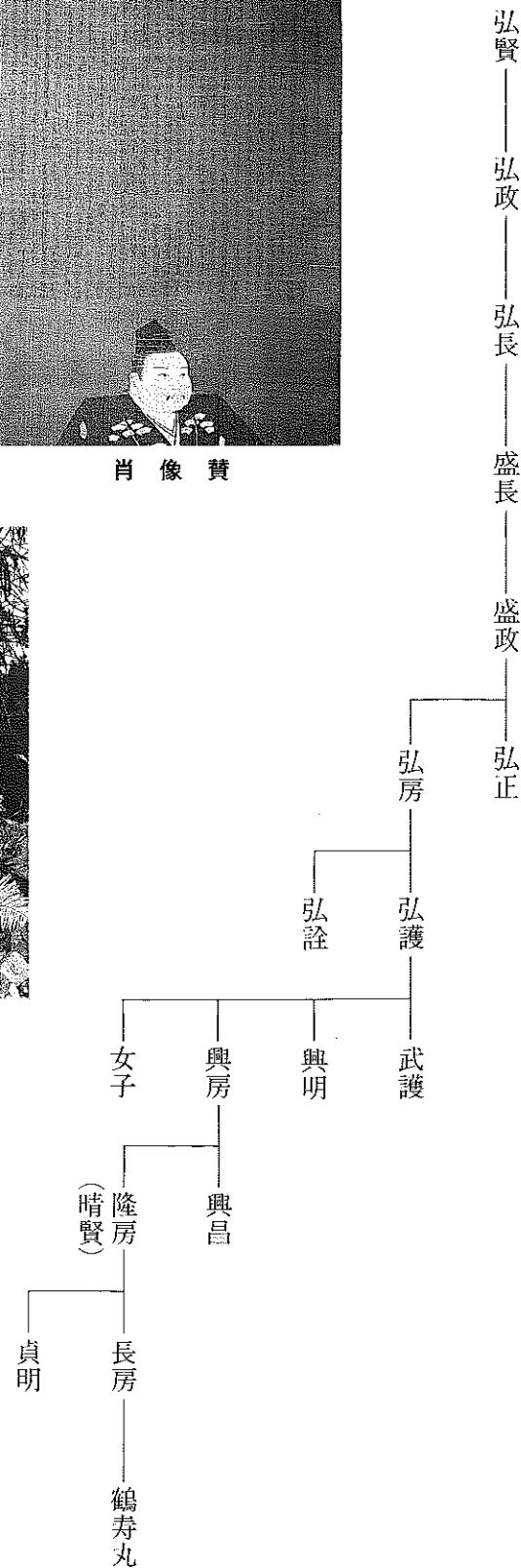
陶氏略系図



肖像賛



弘護室の供養塔



国指定特別天然記念物

やしろ 八代のツルおよびその^{とらいち}渡来地 1地域

指定年月日 平成元年8月14日

所在地 徳山市中須南大峠なかすのみむたが

ナベヅルは渡り鳥で、日本に渡ってくる中では最も小さなツルである。成鳥はおよそ体重5kg、身長124cm、嘴10cm、脚の長さ62cm、両翼を広げた長さ184cmで、胸部は灰黒、頭と首は白に近い色をしている。

毎年初冬11月から翌年の早春まで、本州では唯一の場所として熊毛町八代に飛来する。付近の田を餌場とし、寝ぐらは八代盆地をはじめ徳山市中須南大峠、下松市米川大藤谷などに点在している。

記録によると、明治の初め頃は30羽程度であったものが徐々に増加し、昭和15年の冬には350羽と最も多く来ている。しかし、その後は減少し昭和40~50年代に一時増えたものの、現在は40羽前後となっている。

大正10年、ツルおよび渡来地の八代が国の指定を受け、さらに平成元年、寝ぐらとして徳山市と下松市の地域が追加指定された。

餌場(熊毛町八代)のナベヅル

